



Series 「つよし会と鶺戸さん」②

つよし共働センターと御田植神事

鶺戸神宮 宮司 黒岩昭彦

鶺戸神宮の年中行事として、稲作にかかる一連の神事があります。

2月には、祓い清められた^{もみたね なえどこ}籾種を^{はしゆさい}苗床にまく^{ごしんでん}播種祭を^{きよばらいさい}斎行します。3月初旬には^{つぎなみさい}御神田^{ぬきほさい}清祓祭を、そして同月下旬頃に御田植祭を行います。ついで4月から7月の15日には御神田^{つぎなみさい}月次祭を、7月下旬頃を目途に^{ぬきほさい}拔穂祭を実施するという流れです。丁重な神事を行っていることを以て、如何に稲作を重要としているのかを解っていただけるのではないのでしょうか。

この稲作のお手伝いをさせていただいているのが、つよし共働センターの皆さんです。

播種祭は、平成30年よりつよし共働センター内にて行っています。もちろんその後の^{ごくあげそうだい}苗床の管理と育成もお願いしています。もともとは、御供上総代の^{のりと たなひじ}田中様をお願いしていましたが、ご高齢により奉仕することが難しくなってきました。そこで日頃より教育の一環として稲作をとりいれていっしやる、つよし共働センターに依頼することとなったのです。

また、御田植祭や拔穂祭には、JA女子職員や鶺戸小中学校の生徒さんたちと一緒に奉仕してくれます。機械を使わない昔ながらの手植えです。稲の成長を願う^{のりと たなひじ}祝詞に、「手^{みなわかぎた むかもも ひじかきよ}腕に水泡搔垂り向股に泥搔寄せて」とありますが、まさにこの描写のごとくです。つよし共働センターの利用者さんたちも、地域の人や子どもたちに交じりながら泥まみれになって楽しく奉仕してくれます。やがてたわわに稔った黄金色の初穂を鎌で刈り取ります。

このような神事を通して、収穫の愉しみや食物の大切さも知ります。皆と一緒に汗を流して奉仕することによって、老若男女を問わず心が一つになります。つよし共働センターの皆さんは、我が国の基本をなしている稲作の担い手であり、それにかかる伝統神事の継承者でもあるのです。

そして収穫した稲穂の一部を、伊勢神宮の^{かななめさい}神嘗祭（10月17日）の初穂として奉獻します。伊勢神宮のご祭神である^{あまてらすおおみかみ}天照大御神は、日本に「稲作の技術を広めるよう」に命じられた神さまだからです。また精米したものは、年間の鶺戸神宮の神さまへのお供えや、参拝者へのお祝いの餅としても大切に使われます。

このように鶺戸神宮の稲作は、つよし共働センターの皆さんのご協力をいただいています。今年もコロナウイルス感染症のために参加いただけなかったことはとても残念でしたが、来年こそ皆さんと一緒に奉仕できることを楽しみにしています。



黒岩宮司様には今後掲載していただくことになりました。